

競 争 (縮圖劇)

場所

或る海濱の旅館の裏手、座敷から橋がかりに濱邊に臨んで建てた涼屋、藤椅子、テーブルなど備付けてある。こゝへ出て居る客は二人きり。

時

初秋の夜

人物

羽庭 田室 清水たまえ

羽庭。もう私達も、そろそろ歸り支度をしながらくちやなりませんね。一月といや長いやうだが、斯うなつて見ると、あつけないいものですね。

清水。え、全くですわね。夢のやう、でも羽

庭さんは一月いらしたのですが、私のはまだ、まる三週間にもなりませんよ。

羽庭 さうです。あなたのいらつしやつたのは、僕等が来てから、ちやうど十日目でした。僕はあれ以来の事を、不思議なほどあざやかにおぼえてゐます。あの晩は、そら、やつぱりこんなやうに暗い晩で、私たちが其暗いのを利用して、濱邊から覗き込んで、下座敷にぐつたりとなつていらつしやるあなたを、殘酷なほどよく見ましたつけ。

清水。ほんとにひどい方ねえ、私知つてゐたら、懲らしてあげるのでしたつけ。

羽庭 所がなか／＼懲らされる段ぢやない、さかさまに、こつちから逆襲しようといふんですからね。田室と来ちやあ、とてもあなたなんかの及ぶ所ぢやない。人間もあつ／＼しくなつて来ると、たしかに強者ですね、人を征服するに足りますね。

清水。でもあの方のは、たゞ肉の強者なんです。靈の征服者にはなれませんわね。

羽庭 さうでせうか？ 僕も元來その主義なのですが、此の節少々不安になつて來ました。世の中はやつぱり肉から征服してかゝらなければ、負けさうですね。

清水 私、さうは信じませんわ。やつぱし心が先ですよ。肉體的に來る誘惑は一時は強いやうですけど、それだけだと跡が殺風景ですよ、しもゆかしい所がありません。

羽庭。たとへば？

清水。たとへば……？

羽庭。あなたが假りにさうした誘惑を受けたとしますかね。

清水。え、ようございます、假りにですよ。

羽庭。假りに。さうしたら、あなたはどうなさるでせう？

清水。わたし？

羽庭。え、それは知れてますわ。一喝の下に斥けてやります。

羽庭。一喝の下に？

清水。え、一喝の下に。

羽庭。は、それはだめだ。僕の見てる女といふものは、そこへ行くと弱いものです。僕が不安に思ふのはそれですよ。

清水 いけません。それはまだあなたが女の本たうの心持ちを知つていらつしやらないからです。それはねえ、他に氣を引かれるものが別に何もなく、そのまあ……男なら男がそれほど厭なのでもないといふ場合なら、それは随分どんな機で無理から誘惑されてしまふ事が無いとも限りません。けど一方に心をひかれるほどのゆかしいものがあるつて、比較するとすれば、いくら一方が肉的な亂暴な事をして来たからつて、さうたやすく自由になるものぢやありませんよ。いくら女だからつて、さう見くびつたものぢやありません。そこへ行けば、男の方こそ却つてい

くちが無いといふぢやありませんか。弱いの

は男ですよ、それこそ肉體的誘惑でも受けようものなら、ぐにやぐになつて了ふと言ふから。

羽庭 つまり男は正直なのですね、すぐ眞に受けて了ふのです。

清水 あら、苦しい辯護ね。さうだと、何だか女ばかりが不正直なやうに聞えますよ。い

い面の皮ですわ。

羽庭 いや、そんな譯ぢやないんです。無論女だつて……あゝ、もう僕は退却しよう、いつ

でも此の邊まで来ると撃退されて了ふんだから、つまらない。

清水 えゝ？ 何ですつて？ どうおつしやる？

羽庭 ……
清水 羽庭さん！ 撃退ですつて？ ほゝゝ、何の事？ それは。聞かしてちやうだい、ね。

羽庭 清水さん！

清水 えゝ。
羽庭 ……
清水 波が光りますこと。あんなに暗くて、やつぱり何處かに光りがあるのですわね、反射する所を見ると。

羽庭 あの中には發光體のものもあるのですう。

清水 さうでせうか？ あらゝ、あんなに光つてよ。それにちつとは星明りもありますわね。……人が滅つたせぬだか、淋しくなりましたこと。つい此の間までは、どんな暗い晩だつて、人影の絶えたことはなかつたのです

が。向うの家なんか火が消えたやうに森としてゐますわ。それに風の寒いこと、東京も

う秋でせうね。

羽庭 急に歸りたくなつたのでせう？

清水 えゝ、里心がついてね。けれども實際は歸りたくないの。まあ、いやな東京へ歸らなくちやならないかと思ふと、心細い氣持になりますわ。あなた歸りたいでせう？

羽庭 いゝえ、僕はいつまでも斯うしてゐたいと思ふ位だから、東京なんかでんで思ひ出しもしません。清水さんなんか、仕事

だから、いゝ加減こんな所へ来ていらつしやると、また華やかな都會が戀しくなる筈です

がねえ。音楽會の夢は見ませんか。

清水 ですけど、羽庭さん……たゞ華やかな席へ出て、人いわい言はれる位の事で、本當の満足が得られるでせうか？ 私の胸の底には、もつと大きな傷が口を明いてるので

すよ。そんな上つちらの事で、其の傷が癒えるでせうか。……私は東京にゐても淋しいんですよ。それはね、あゝして華手な社會に立ちまじつてゐますと、氣は紛れますけれど、

それはたゞ麻酔劑でしびらせたやうなもので

す、一時忘れてゐるだけの事です。是れからまた、相も變らず、あのピアノ臺にしがみついて……あゝ、もう、私……

羽庭 でも清水さん、あなたはさうして……

(此の途端に田舎入り来る)

田室 何だかいやにしんねこだね。おい、氣をつけえ、羽庭君。清水さんもいけないや。僕がちよつと油斷をすると、もうすぐ是れだから困つちまふ。

清水 何をです？

田室 何だつて彼んだつて、一體いけないや、さう内證話ばかりしてゐちやあ。

清水 内證話なんかしやしません、ねえ、羽庭さん。

羽庭 君等には分らない話をしてゐたのさ。

田室 分つてるよ。また例の人生だらう。人生が淋しくて運命が神祕で、そこで、二人は道づれになりませう、てな話だらう？ 六道の辻で女を拐かすやうな話はよせよ。

清水 田室さん、そんな事を言ふのは、およしなさい。口のわるい！

田室 口はわるくても、腹はこれで極いものです。一體口の悪いものは腹は綺麗なものですよ。却つて口のいい奴が油斷がならんで、

口のいい奴が、僕なんかのは是れで、口ばつかりですからね。吹抜の鯉と同じです、腹はからく、江戸ッ兒だ、其くせ生れは上方ですがね。

羽庭 あんまり口ばかりでもなさきうだよ。

少くとも手くらゐのはちよい／＼出します。

田室 おい、人聞のわるい事を言ふなよ。ちよい、ちよい手を出しやあ。掏兒の見習だぜ。ねえ、清水さん、向うの端に火が三つ四つ見えるでせう。

清水 どの邊にですか？ 私眼がわるくなつたのかしら。

田室 そうら、此の見當、僕と顔を同じ方角に並べて御覽なさい。女を抱くやうにして肩をつけ顔を寄せなさい。ねえ、見えるでせう？

清水 え、え、え。(女は羽庭の方へ氣を兼ねて、ちよつと身を引く)

田室 あれが、そら、昨日見て置いた出ツ端の所ですよ。夜と晝とは方角が違ふやうに見えませう？

清水 まるで違ひますのね。

田室 今日、船を出させればよかつたつけ、惜しいことをしましたよ。

清水 (此のとき羽庭行きかける)

清水 羽庭さん、もうおやすみ？

羽庭 いや、ちよつとそこらをぶらついて來ます。

清水 さう？ ちや、行つていらつしやい。

羽庭 あなた、最後の散歩はどうです。

清水 さうですな…

田室 寒くて、しやうがあるものか、およしなさい、およしなさい。(押し戻すやうに女の肩にさける) 君もよしたらどうだ。ぶらつくのもいいが、あんまりぶら／＼して、風邪でも引くと大變だぜ、避暑に來て、風邪をひいて歸つちや引き合はない。

清水 寒いたつて、そんなちやありませんよ。みんなで御一緒に出かけたら？

田室 ちよいとく、後生だから手を貸して下さい、襟！ 襟！ あゝ、たまらん、痛い！くすぐつたい！ 早くく。

清水 どうなすつたの？ 痛むんですか？ 揉めばいいんですか？

田室 蟲ですく、蟲が這入つたのです。

清水 え？ 蟲？ お、氣味がわるい。

田室 そら、此のいかなぶん／＼め、背中ちう這ひ廻りやがつて。

清水 かなぶん／＼ですか、馬鹿らしい。私また氣味のわるい蟲でも這入つたのかと思つたわ。騒ぎが大きいものだから、びつくりしましたわ。

(此のとき羽庭は出て行つた跡である)

田室 は、は、計略が圖にあつたでせう？ 羽庭は行つちまひましたよ。

清水 ほんとに人の悪い！

田室 それやさうと、愈々お別れが近づきましたね。

清水 全く早いものね、今もさう言つた所でですよ、まるで短い夢のやう。

田室 夢にしちやあ、随分人じらしな夢でしたね。

清水 どうして？

田室 どうしてつて、あなたも随分人が悪い。

どこまで行つても、こゝまでお出で、たうと、あすお立ちといふ所まで引ばつて來たの

だもの。

清水 また田室さんのお極り、そんな事をおつ

しやると、私もういや、行つちまひますよ。

田室 おつと待つて下さい、此のまゝ行かれち

やあ、元も子も無くしてしまふ。

(女の手を取る、それをそつと除けて)

清水 ほんとにあなたは肉體的ねえ。

田室 え？

清水 いゝえ、こつちの話。

田室 いけないね。あの羽庭と二人で、無

暗と僕を肉體的にしてたふものだから、全

體、人間といふものが肉體的ぢやありませんか。精神的だの神祕的だのつて、それやあ氣が頭へ上つた奴の言ふ事です。昔から肉體的にならないラヴなんでもがありますか。

あれはそれは、ならないのぢやなくて、なれなかつたのだ。ならせれや、みんな肉體的になつて了ふ。それが悪けれや、第一人間の子孫からして絶やさなくちやなりません。古い理窟さね。

(マツチを指り巻煙草に火をつけ、あとの燃さしを女と自分の顔の間に掲げて照し

見る。雙方ちよつと顔を見合つて)

清水 でもあなた、それだけの議論をなさるの

は眞面目だね。

田室 眞面目ですとも、大まじめ。

清水 あなたのやうな人が眞面目におなんなさ

ると、何だか氣の毒ね。滑稽ですわ。

田室 には怪しからん。(女の兩手を取る、

女は笑ひながらすりぬけようとする、それを固くつかんで) さあ、もう逃しません。人が

まじめになつて話してるのを、滑稽だなんて。

清水 だつて、いゝぢやありませんか、私、その滑稽が好きですよ。お、痛い、お離しな

さいてばね、そんな失敬な事をなさると、私

おこりますよ。(言ひながら尙手を取られたまゝぢつとしてゐる)

田室 おこつて下さい、おこらせでもしなくち

や、あなたは眞面目になつて呉れないから。

羽庭と話す時だけ、いやに生まじめになつてさ。僕に向ふと、まるで態度を一變するんだもの、ひどいや。

清水 あなたがさうさせるのですよ。だつてさうでせう？ 羽庭さんのやうに生まじめな話

ばかりしてゐちや、窮屈でいけないつて、あな

た、さうおつしやつたでせう？ 實務家の癖に哲學者のやうな事はかき言つてゐるつて。

田室 それや、あなた、いくら眞面目だつて、

あゝどうも、人生だの藝術だのばつかし轉がしてゐた日には、たまりませんや。まじめつ

たつて、まじめになりやうがあります。ちよ

いと斯う急所々々で眞面目になつてさへ貰へ

ば、それで話は極まらうと言ふものです。

(羽庭歸つて來て入口を這入つたまゝ立つてゐる、二人は氣がつかぬ)

清水 お、暑い、あなた、あんまり接近なさ

ると暑くなるんですよ。もつと離れてい

らつしやい。

田室 さう駄で押さなくつてもいゝでせう。

清水 あら、駄焼砲？ はゝ、はゝ、御免なき

いよ。そんな意味ぢやなくてよ。

田室 ねえ、清水さん、僕實際眞面目ですがね

え……

清水 枕辭がつきましたのね。

田室 あなた、あの羽庭と僕とどつちがお好

き？

清水 へえ？ 何ですつて？

田室 僕と羽庭とですよ。

清水 まあ、あなた、随分亂暴な事をおつしやる

方ね。あきれて了ふわ。こんな亂暴な人を、

私、見たことが無い。

田室 だつて、それが要點です。事務を敏活な

らしめる所以です。え？

清水 存じませんわ、そんな事。

田室 何もさう、色だの戀だの言はなくつて

もいゝでせう。たゞ友人として、フレンドと

してさ。どちらの柄がお氣に召しますか、中

形？ 辨？ それともどちらも木綿のものでお

氣に入りませんか？

清水 お答への限りでございませぬ。

田室 僕が好きなら好きだと、遠慮なく言ふこ

とですよ、恥かしがるには及びませぬ。

清水 田室さんてばねえ！ 私、もういや。

田室 これで分りの早い男ですから、御希望の

方はどうか……

清水 もうく田室さんにはかなはない。私も

う御免蒙りますよ、あすまたお目にかゝりま

す。

田室 まだいゝでせう？ まだ早い。(時計を出

して見て) 九時にならない。もう少しいらつ

しやい。もう亂暴な事は申しませぬから。

清水 でも、お蔭で今夜はおもしろうございま

した。

田室 羽庭がゐると尙おもしろかつたのだが。

あの男、あれでなか……

(羽庭二人の方へ行く)

清水 おや、羽庭さん、いつ歸つていらしつて？

私ちつとも知りませんでしたわ。

田室 (本能的に二三歩田室の側から離れる)

田室 這入つて来るにまで、しんねこだなあ、

君。

羽庭 君の方が夢中で氣がつかかなかつたんだ

よ。

田室 それやさうだ、どつちかに違ひない。鐘

が鳴つたか撞木が鳴つたかき。そこで？ 今、

君と僕とどつちが清水さんは好きだらうとい

ふ問題を出した所き。

清水 およしなきいよ、そんな話は。

田室 所が、どつちに團扇が上つたと思ふ？

君。

羽庭。どつちにも上らなかつたらうき。

田室 所が上つたよ、君に。だからおこれと言

ふことよ。

清水 あら、いけないのねえ、そんな出たらめ

ばかり言つて。私こまつちまふ。

田室 はゝ、はゝ、あんまり喋つて咽が乾いて

來た。麥酒でも飲んで來んか。

(行きかける)

羽庭 僕は飲みたくないから、君行つて來たま

へ。

田室 つき合へく。

羽庭 いやだ。

田室 行かないか、頑固な男だな。

(出て行く、羽庭はそれを見送つて、ふり

かへり、女と顔を見合す)

清水 (微笑して) 肉體的誘惑！

羽庭 (眼が輝き體がふるへてゐる) 僕さうし

てあなたの體を汚して見ちゃゐられない。

清水 あら、體を汚しなんかしませんわ。

羽庭 なあに、今に負けてしまひます。

清水 懼りながら、そんな女ぢやございせんよ。その事、あなたには、よく分つてる筈ぢやありませんか。

羽庭 ですけど、だめですよ。僕は不安です、僕に取つちや貴いあなたですもの、出来るなら、いつまでも其のまゝにして、讚美してゐたいのだけれど、人がさうして置かない、危険です……どうせさうなるものなら……さうだ！ 一そ僕が……

(突然女を引よせ 熱烈く接吻する、女驚いて見上げて)

清水 あゝ！ (首を垂れる)

羽庭 さう……斯うして僕の手で救はせて下さい。内で肉を防いでやる！
(再び女を抱く、女は頭を男の胸につける) (幕)

古い形式に則つた歌舞伎劇には、今日とこそ新作は殆ど無用である、現代人の作る作には、いやでもおうでも其の複雑な思想の勝つた生活が影をささずには置かない、内容がそ



れ相應に遡入つて来る、内容の目にさける程度の歌舞伎劇は無意味である、歌舞伎の面白味は其の純形式的なところにある、よく言へば虚靈趣味、わるく言へば荒唐無稽趣味にある、成るべく内容に觸らないやうに、生きた生活意識を攪動しないやうに、時としてはわざと大とぼけにとぼけてはいはゆる江戸式のファンやウキツトバトルで思想の理に落ちる手がかりをまいて了はなければつまらない、そして其の煙にまかれて居る見物をおうなしに色と線と運動と音響との節奏形式の中に包み上げて了ふだけが歌舞伎劇である、歌舞伎劇を見ても間は、必ず生活意識の眼をさましてはならない、現代人の作者にこゝまでとぼけることが出来ない、だから作らない方がよい。

る、あれを真剣になつて見てゐる見物の顔を見廻しては、いつも失笑を禁じ得ない、たゞ其の中のところ／＼に例の音楽的結晶點があるだけに、沙漠でオアシスに出會つたほどの清爽な氣持でほつとして救はれる、是れは誰れしも同じ経験であらう、其の結晶點すら、なまなか筋の通つたものであればあるほど少なくなつて来る、其の上に役者までが筋の上の人情が何かにくだらぬ力指を入れて、此の大事な結晶點を手薄に演じて了ふ、こへ行くと上手でも下手でも、尻橋がよい、矢の根がよい、助六も道成寺も勸進帳もいゝ、それも出来るだけ節奏を純粹にして結晶させるだけいゝ、此のごろ見た新作改作の歌舞伎劇、たとへば玉藻の前とか葵の上とかいふたぐひのものは、ところ／＼無意識的(?)に虚靈的な要素をつかつて、現代生活の手がかりを無くしようとして、現代生活の形式の上にも階段をあしらつた玉藻の前の動作などで純形式を屈つた箇所がまじつてゐるに拘らざ、面白くない、要するに現代人では舊式の歌舞伎劇はもう作れないのだ、人が違つて来たのだから仕方がない、藝術はやつぱり人である。

(僕のペーシヨウ)